

懸念的被透視感が生じる状況の特徴^{1,2)}

筑波大学大学院人間総合科学研究科 太幡 直也³⁾

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 吉田富二雄

Characteristics of the situation arousing a sense of unwanted transparency

Naoya Tabata and Fujio Yoshida (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The feeling, during an interaction with another person, that they have noticed something about you that you would prefer to remain concealed is known as a sense of unwanted transparency. As little attention has been to this sense of unwanted transparency to date, the purpose of this study is to investigate the characteristics of situations that give rise to the sense of unwanted transparency. Undergraduate students were asked to recall their experiences of feeling the sense of unwanted transparency in a semi-structured interview. The results indicate three main characteristics. Firstly, there are both self-oriented and other-oriented reasons for concealing one's inner self. Secondly, inferences about the other's responses and perceptions about self-responses can trigger the sense of unwanted transparency. Thirdly, due to the sense of unwanted transparency, individuals are likely to make responses that seek not to draw attention to one's inner self.

Key words: sense of unwanted transparency, content characteristics, situational characteristics, responses

問題と目的

日常生活で、ある他者とやりとりをしているときに、その相手に気づかれないように自己の内にとどめている事柄（以下、内面）を、気づかれているかもしれないと感じることがある。このような感覚を、太幡（2008a）は、懸念的被透視感と定義した。懸念的被透視感は、“自分で直接的に伝えていない

のに、相互作用する相手に自己の内面を気づかれているかもしれないと感じる感覚”である、被透視感（太幡，2006，2008b；太幡・押見，2004）の下位概念であると位置づけられる。すなわち、気づかれにくい事柄に対する被透視感が、懸念的被透視感である。

懸念的被透視感のような、自己の内面を他者に気づかれているかもしれないという意識、すなわち、内面の被知覚の意識には、近年、注目が集められている（Vorauer, 2001）。そして、内面の被知覚の意識に関するいくつかの概念が提唱されている。例えば、その意識を対人恐怖症や統合失調症の症状として捉える自我漏洩感（丹野・坂本，2001）、相手が内面を知覚したと正確に推測した程度よりも内面の被知覚の程度を過大評価する認知的バイアスである透明性の錯覚（*illusion of transparency*; Gilovich, Savitsky, & Medvec, 1998）といった概念が提唱さ

- 1) 本論文は第一著者の2007年度博士論文（筑波大学人間総合科学研究科）の一部を加筆・修正したものである。研究の実施にあたり、山本真理子教授（筑波大学）にご指導いただきました。記して感謝いたします。
- 2) 本論文の一部は、日本社会心理学会第45回大会（2004）、日本心理学会68回大会（2004）にて発表された。
- 3) 日本学術振興会特別研究員。

れている。

内面の被知覚の意識に関するこれまでの研究の未検討点として、内面の被知覚の意識が対人コミュニケーションの進行に与える影響について検討されていない点が挙げられる。内面の被知覚の意識が生じるためには、自己の内面を知覚する相手が存在することが前提となる。そのため、一般的には、内面の被知覚の意識は、対人コミュニケーションの中で生じると考えられる。しかし、内面の被知覚の意識に関する既存の概念は、内面の被知覚の意識を、自我漏洩感のように病理的な感覚として、あるいは、透明性の錯覚のように相互作用の結果として生じる認知的バイアスとして捉えている。そのため、対人コミュニケーションにおいて生じる内面の被知覚の意識が、当該の対人コミュニケーションの進行に与える影響については焦点が当てられていない。しかし、懸念的被透視感に着目することで、対人コミュニケーションの中で生じる内面の被知覚の意識を捉えることができるため、上記の未検討点を明らかにすることが可能になる。そして、懸念的被透視感に関する実証的知見を蓄積することで、対人コミュニケーションの理解を深めることができると期待される。しかし、これまでの研究では、懸念的被透視感のような感覚には焦点が当てられていなかったため、懸念的被透視感が生じる状況の特徴は十分に明らかにされていない。したがって、懸念的被透視感を実証的に検討するために、懸念的被透視感が生じる状況の特徴に関する基礎的研究が必要になると考えられる。

以上のことから、本研究では、懸念的被透視感が生じる状況の特徴について検討することを目的とする。本研究では、以下の二点に着目する。一点目は、懸念的被透視感を感じた事柄、その事柄を伝えていなかった理由といった、内容的特徴である。二点目は、懸念的被透視感を感じた相手、懸念的被透視感を感じた根拠といった、状況的特徴である。なお、内容的特徴については、秘密にされる事柄と深く関連していると考えられる。そこで、得られた知見について、秘密にされる事柄に関する研究(e.g., Kelly, Klusas, von Weiss, & Kenny, 2001; Norton, Feldman, & Tafoya, 1974)の知見と対比し、考察する。

また、以上の二点の検討と併せ、懸念的被透視感を感じた者が生起させた反応についても検討する。懸念的被透視感が生じる状況は、ある事柄を気づかれたいという基準と、その事柄を気づかれていないかもしれないという現在の状態に不一致が生じている状況であると考えられる。したがって、基準と

現状の不一致を修正するという、自己制御(Carver, 1979; Carver & Scheier, 1981, 1998)が生じやすいと想定される。また、気づかれたいという意識が高いときには、懸念的被透視感を感じた際に、基準と現状の不一致の程度が大きくなると考えられる。以上のことから、懸念的被透視感による反応と内面を気づかれたい意識の高さとの関係についても探索的に検討する。

本研究では、懸念的被透視感が生じる状況の特徴について詳細な想起を求めるため、半構造化面接を実施する。また、懸念的被透視感の特徴を明確にするため、懸念的被透視感の比較対象として、気づいてほしい事柄についての被透視感を期待的被透視感と定義し、期待的被透視感の特徴についても検討する。併せて、予備調査において、懸念的被透視感が日常の対人コミュニケーションでしばしば生じていることを確認する。

予備調査

懸念的被透視感在日常の対人コミュニケーションでしばしば生じていることを確認するために、予備調査を行った⁴⁾。大学生141名(男性63名、女性78名、平均年齢 20.64 ± 1.99 歳)に対し、“相手とやりとりをしているときに、気づかれたいことを気づかれているかもしれないと感じることがしばしばある”の1項目に、“1. 全くあてはまらない”、“2. あまりあてはまらない”、“3. どちらともいえない”、“4. ややあてはまる”、“5. 非常にあてはまる”の5件法で回答を求めた⁵⁾。その結果、平均値は3.21 ($SD = 1.13$)であり、理論的中間点(3点)よりも有意に高かった($t(140) = 2.06$, $p < .05$)。また、それぞれの選択肢の選択率は、“4. ややあてはまる”が35.2%、“5. 非常にあてはまる”が11.2%であった。一方、“1. まったくあてはまらない”は7.2%であった。以上の結果から、個人差はあるものの、懸念的被透視感在日常の対人コミュニケーションでしばしば生じていることが示唆された。

方 法

調査対象者・手続き 大学生20名(男性10名、女

4) 予備調査は、“隠し事に気づいた手がかり”に関する調査の一部として実施された。

5) 予備調査で用いられたその他の質問項目については、本論文では割愛する。

性10名、平均年齢22.30±.93歳)に対し、個別に半構造化面接を行った。調査時間は約30分であった。

質問内容 調査対象者に、“ある相手とやりとりをしているときに、その人に対して、自分から直接的に伝えていない、感情、考え、思っていること、性格、隠している本当のことなどが、気づかれているかもしれないと感じた経験についてお聞きします”と教示した。次に、懸念的被透視感に関する経験に想起を求めるために、“自分にとって、相手に気づかれないと思う内面について、最近、そのように感じた経験を思い出してください”と告げ、以下の事柄について質問した。内容の特徴として、懸念的被透視感を感じた事柄、その事柄を伝えていなかった理由に回答を求めた。状況の特徴として、懸念的被透視感を感じた相手、懸念的被透視感を感じた根拠に回答を求めた。また、懸念的被透視感によって生起させた反応に回答を求めた。併せて、想起された経験の気づかれない意識の高さを確認するために、その事柄を気づかれないと思っていた程度について、“あまり”、“やや”、“かなり”、“非常に”の4件法で回答を求めた。複数の経験がある場合には、それぞれの経験について想起を求め、上記の質問を繰り返した。続いて、期待的被透視感に関する経験に想起を求めるために、“自分にとって、相手に気づいてほしいと思う内面について、最近、そのように感じた経験を思い出してください”と告げ、懸念的被透視感と同様の質問をした。併せて、想起された経験の気づいてほしい意識の高さを確認するために、その事柄を気づいてほしいと思っていた程度について、“あまり”、“やや”、“かなり”、“非常に”の4件法で回答を求めた。複数の経験がある場合には、それぞれの経験について想起を求め、質問を繰り返した。回答内容は、調査者によって記録された。なお、順序効果を考慮して、半数の調査対象者には、期待的被透視感に関する経験について先に回答を求めた。調査時間は平均で約30分であった。

データの分類 それぞれの項目について、回答の結果得られた内容を基に、社会心理学を専門とする大学院生2名が分類カテゴリーを作成した。次に、分類カテゴリーを作成した2名とは別の2名の評定者(大学院生)が、それぞれの項目ごとに各回答を分類評定した。一致率は、懸念(期待)的被透視感を感じた事柄が87.9%、その事柄を伝えていなかった理由が85.7%、懸念(期待)的被透視感を感じた相手が100.0%、懸念(期待)的被透視感を感じた根拠が92.3%、懸念(期待)的被透視感によって生起させた反応が95.6%であった。分類されたカテ

ゴリーが不一致だった場合には、両者の協議により再分類するように求めた。

結 果

得られた経験の個数 調査対象者から得られたのは、懸念的被透視感に関する経験62場面、期待的被透視感に関する経験29場面であった。懸念的被透視感に関する経験は20人全員から抽出された(最少1, 最大8)。期待的被透視感に関する経験は、20人中17人から抽出された(最少0, 最大3)。一人あたりの経験の言及数を比較すると、懸念的被透視感に関する経験($M = 3.10$, $SD = 1.62$)の方が期待的被透視感に関する経験($M = 1.45$, $SD = 0.95$)よりも多く言及されていた($t(19) = 4.52$, $p < .001$)。

気づかれない(気づいてほしい)程度 懸念的被透視感を感じた事柄を気づかれない程度は、“やや”は37.1%、“かなり”は29.0%、“非常に”は25.8%と多く選択されており、“あまり”は8.1%であった。期待的被透視感を感じた事柄を気づいてほしい程度は、“やや”は37.4%、“かなり”は48.3%と多く選択されており、“あまり”は10.3%、“非常に”は3.5%であった。したがって、気づかれないという意識、気づいてほしいという意識がある程度高い経験が想起されていたと考えられる。

内容的特徴 懸念的被透視感、期待的被透視感を感じた事柄については、“相手に向けた気持ちや感情(相手を嫌いだと思っていることなど)”、“伝えていない事実(自分とある友人との間に起こった出来事など)”、“現在抱いている気持ちや考え(サークルに参加したくない気持ちなど)”、“ウソをついたこと(聞かれた質問に対してウソをついていることなど)”、“性格や特徴(社交的ではない性格など)”、“第三者に対する気持ちや感情(自分がある人に好意を抱いていることなど)”に分類された。それぞれのカテゴリーに分類された経験の割合をTable 1に示す。懸念的被透視感に関する経験と期待的被透視感に関する経験とを比較すると、懸念的被透視感を感じた事柄には、“伝えていない事実”や“ウソをついたこと”が多く見られた。

対象となる事柄を伝えていなかった理由については、“二人の関係への配慮(よい関係を壊したくなかったからなど)”、“自己評価低減の回避(相手がどう受け止めるのかが怖かったからなど)”、“相手への配慮(相手に対して申し訳なかったからなど)”、“恥ずかしさ(知られると恥ずかしいからなど)”、“状況からの回避(休みたかったからなど)”、

“相手との関わりの回避（相手を避けたかったからなど）”, “二人の関係上（立場上言い出せなかったからなど）”, “相手の理解への期待（自分の気持ちをわかってもらいたかったからなど）”, “その他” に分類された。それぞれのカテゴリーに分類された経験の割合を Table 2 に示す。懸念的被透視感に関する経験と期待的被透視感に関する経験を比較すると、懸念的被透視感には、“自己評価低減の回避” や “二人の関係への配慮” が多く見られた。一方、期待的被透視感には、“相手の理解への期待” や “二人の関係上” が多く見られた。

状況的特徴 懸念的被透視感、期待的被透視感を感じた相手については、“友人”, “目上の人”, “親”, “恋人”, “立場が同じ人（サークルの同期など）”, “目下の人”, “その他” に分類された。それぞれのカテゴリーに分類された経験の割合を Table

3 に示す。懸念的被透視感に関する経験と期待的被透視感に関する経験を比較すると、両者とも “友人” が多く見られた。

懸念的被透視感、期待的被透視感を感じた根拠については、“相手の反応からの推測（相手の表情や態度を見てなど）”, “自己の反応の知覚（自分の話している内容がウソくさかったからなど）”, “わからない”, “その他” に分類された。それぞれのカテゴリーに分類された経験の割合を Table 4 に示す。懸念的被透視感に関する経験と期待的被透視感に関する経験を比較すると、懸念的被透視感には、“相手の反応からの推測” と “自己の反応の知覚” が同じ程度多く見られた。一方、期待的被透視感には、“相手の反応からの推測” は多く見られたが、“自己の反応の知覚” はほとんど見られなかった。

反応 懸念的被透視感、期待的被透視感によって

Table 1 懸念（期待）的被透視感を感じた事柄（%）

	相手に向けた気持ちや感情	伝えていない事実	現在抱いている気持ちや考え
懸念的被透視感	32.3	30.6	11.3
期待的被透視感	48.3	10.3	24.1
	ウソをついたこと	性格や特徴	第三者に対する気持ちや感情
懸念的被透視感	14.5	8.1	3.2
期待的被透視感	0.0	10.3	6.9

Table 2 対象となる事柄を伝えていなかった理由（%）

	二人の関係への配慮	自己評価低減の回避	相手への配慮	恥ずかしさ	状況からの回避
懸念的被透視感	32.3	24.2	21.0	9.7	6.5
期待的被透視感	6.9	0.0	10.3	13.8	10.3
	相手との関わりの回避	二人の関係上	相手の理解への期待	その他	
懸念的被透視感	3.2	1.6	0.0	1.6	
期待的被透視感	10.3	13.8	24.1	0.3	

Table 3 懸念（期待）的被透視感を感じた相手（%）

	友人	目上の人	親	恋人	立場が同じ人	目下の人	その他
懸念的被透視感	41.9	19.4	12.9	12.9	6.5	4.8	1.6
期待的被透視感	58.6	17.2	3.4	3.4	17.2	0.0	0.0

Table 4 懸念（期待）的被透視感を感じた根拠（%）

	相手の反応からの推測	自己の反応の知覚	わからない	その他
懸念的被透視感	50.0	37.1	6.5	6.5
期待的被透視感	75.9	3.4	17.2	3.4

考 察

生起させた反応は、“反応の統制の試み（気にしていないふりをしたなど）”、“話題からの回避（話をすぐ変えたなど）”、“否定（その内容について否定するような発言をしたなど）”、“取り繕いの表情の表出（照れ隠しの表情をしたなど）”、“話題への関与（気づかれた内容を認める発言をしたなど）”、“言い訳（本当のことを言って言い訳したなど）”、“反応なし”に分類された。それぞれのカテゴリーに分類された経験の割合を Table 5 に示す。懸念的の被透視感に関する経験と期待的被透視感に関する経験とを比較すると、懸念的の被透視感には、多くの場合で反応が生起していた。一方、期待的被透視感では、“反応なし”が多く見られた。

また、懸念的の被透視感によって生起させた反応に関しては、気づかれたくない意識の高さとの関係を探索的に検討した。懸念的の被透視感を感じた経験のうち、気づかれたくないと思っていた程度について、“かなり”と“非常に”と回答された経験（34場面）を気づかれたくない意識高群、“あまり”と“やや”と回答された経験（28場面）を気づかれたくない意識低群とした。それぞれのカテゴリーに分類された経験の割合を Table 6 に示す。気づかれたくない意識高群と低群を比較すると、高群の方が低群よりも、“話題からの回避”や“否定”といった、話題を避けようとする反応が生起していることが多かった。

本研究の目的は、懸念的の被透視感が生じている状況の特徴について検討することであった。そして、内容的特徴、状況の特徴、反応に着目して検討を行った。以下、得られた結果について整理、考察する。

懸念的の被透視感を感じた経験 本調査では、すべての調査対象者から、懸念的の被透視感を感じた経験が想起された。予備調査の結果と併せると、懸念的の被透視感とは日常の対人コミュニケーションでしばしば生じていると考えられる。加えて、懸念的の被透視感を感じた経験の方が期待的被透視感を感じた経験よりも多く想起されたことから、懸念的の被透視感の方が期待的被透視感よりも生じやすいと想定される。

内容的特徴 懸念的の被透視感を感じた事柄については、相手に向けた感情のように、期待的被透視感と共通している事柄がある一方で、“ウソをついたこと”や“伝えていない事実”のように、懸念的の被透視感に特徴的な事柄があることが明らかとなった。また、“性格や特徴”など、個人特性に関わることに對しても、懸念的の被透視感が感じられていることが示された。

対象となる事柄を伝えていなかった理由については、懸念的の被透視感に関する経験では、相手や関係に対する配慮といった他者配慮的な理由と、自己評価の維持や困難の回避といった自己利益的な理由があることが示された。したがって、内面を気づかれ

Table 5 懸念（期待）的の被透視感によって生起させた反応（％）

	反応の統制の試み	話題からの回避	否定	取り繕いの表情の表出
懸念的の被透視感	29.0	16.1	8.1	6.5
期待的の被透視感	3.4	3.4	3.4	3.4
	話題への関与	言い訳	反応なし	
懸念的の被透視感	4.8	4.8	30.6	
期待的の被透視感	6.9	0.0	79.3	

Table 6 気づかれたくない意識の高低による懸念的の被透視感によって生起させた反応（％）

	反応の統制の試み	話題からの回避	否定	取り繕いの表情の表出
気づかれたくない意識高	32.3	20.6	11.8	2.9
気づかれたくない意識低	25.0	10.7	3.6	10.7
	話題への関与	言い訳	反応なし	
気づかれたくない意識高	2.9	2.9	26.5	
気づかれたくない意識低	7.1	7.1	35.7	

たくない理由は、自己利己的な理由と他者配慮的な理由の二つに大別されると考えられる。

内容的特徴と秘密にされる事柄に関する研究 (e.g., Kelly et al., 2001; Norton et al., 1974) の知見とを対比すると、懸念的被透視感の特徴として、以下の二点が挙げられる。第一に、懸念的被透視感を感じた事柄には、秘密にされる事柄に多い、性に関する事柄があまり見られない点である。この理由として、相互作用において、性に関する事柄が意識されにくいことが考えられる。このことから、懸念的被透視感が生じる事柄は、相手との相互作用で意識される事柄であると推察される。第二に、懸念的被透視感では、気づかれたいことを伝えていなかった理由として、他者配慮的な理由が見られる点である。秘密に関する研究では、ある事柄が秘密にされる理由には、自己利己的な理由のみしか見られていない。例えば、Kelly (1999, 2002) や Vrij, Paterson, Nunkeosing, Soukara, & Oosterwegel (2003) は、秘密を明らかにしないことで重要な他者から悪く見られることを回避できると論じている。懸念的被透視感では他者配慮的な理由が挙げられた理由としては、一つには、懸念的被透視感が相手との相互作用によって生じる感覚であることが影響した可能性が考えられる。一般的に、他者との関わりの中で生じる思考や感情のような事柄は、秘密の対象となりにくいと考えられる。これらの事柄は、秘密に関する研究でもほとんど挙げられていなかった (cf., Norton et al., 1974)。一方、懸念的被透視感では、相手との関わりの中で生じる思考などが気づかれたいと思う事柄になる場合も考えられる。したがって、気づかれたいことを伝えていなかった理由として、他者配慮的な理由が挙げられた可能性が推察される。別の理由としては、秘密に関する事柄の研究は主に欧米で行われていることから、欧米と日本人の文化的自己観の違いの影響が見られた可能性も考えられる (cf. 北山, 1994)。すなわち、ある事柄を気づかれたいと思う理由として、相互独立的自己観を持つ欧米人は、個人志向的な理由を挙げやすいのかもしれない。一方、相互協調的な自己観を持つ日本人は、関係志向的な理由を挙げやすいのかもしれない。

状況的特徴 懸念的被透視感を感じる相手については、友人が多いことが示された。これは友人と相互作用する機会が多いためであると考えられる。

懸念的被透視感を感じた根拠については、以下の二点が示唆された。第一に、ほとんどの場合に具体的な理由が挙げられていることから、懸念的被透視感には、何らかの根拠に基づいて感じられている点で

ある。この点は、内面的な事柄が漏れ出てしまう際の根拠が明確でない自我漏洩感と、懸念的被透視感との相違点を示すものであると考えられる。第二に、懸念的被透視感を感じた根拠は、“相手の反応からの推測”と“自己の反応の知覚”に大別される点である。自己の反応の知覚という根拠は、期待的被透視感にはほとんど見られていないことから、懸念的被透視感に特徴的な根拠であると考えられる。

反応 懸念的被透視感に関する経験では、期待的被透視感に関する経験と比べると、多くの場合で何らかの反応が生起していることが示された。この結果から、懸念的被透視感によって、反応が生じやすいと考えられる。また、気づかれたい意識が高いときには、話題を避けようとする反応が生じやすい可能性も示唆された。これらの結果は、自己制御 (Carver, 1979; Carver & Scheier, 1981, 1998) に関する議論と整合する。

懸念的被透視感による反応については、大別すると二種類の反応に分類できることが示された。一つは、“反応の統制の試み”といった、言語内容以外の反応、すなわち、非言語的反応を調整する反応である。もう一つは、“話題からの回避”、“否定”といった、言語内容を調整する反応である。これらの反応は、気づかれたい事柄を気づかれぬように調整する点で共通している。したがって、懸念的被透視感が生じた際に、状況に応じた対処が多くなされていると考えられる。

最後に、懸念的被透視感による反応について、本研究の制約と今後の展望を述べる。本研究では、懸念的被透視感を感じた者に自己の反応に想起を求めているため、懸念的被透視感を感じた者が意識できる反応のみが扱われていると考えられる。しかし、懸念的被透視感とともに焦りが喚起されるならば、視線回避や沈黙といった、焦りを反映するような非言語的反応も表出されやすくなる可能性が想定される。そして、これらの非言語的反応が不自然な印象を相手に与え、かえって何か隠しているのではないかと疑念を抱かれてしまう場合もあると考えられる。場合によっては、そのことがきっかけとなり、気づかれたい事柄を相手に気づかれてしまうことも想定される。このような事態は、気づかれたい事柄を気づかれているかもしれないという推測が皮肉にも逆説的に働き、自らの反応によって実際に気づかれてしまうという現実を作り出していると解釈され、自己成就予言 (self-fulfilling prophecy; Jones, 1977; Merton, 1948) に含まれると考えられる。したがって、懸念的被透視感による反応については、焦りを反映するような非言語的反応について

も検討できるように、実際に生じた反応を測定した研究が必要になると考えられる。

懸念的透視感と期待的透視感の違い 本研究では、懸念的透視感が生じる状況の特徴を検討するために、期待的透視感を感じた状況の特徴を併せて検討し、両者を対比した。本研究の結果から、期待的透視感が生じる状況の特徴としては、伝えていなかった理由として相手の理解への期待といった理由が見られることや、期待的透視感を感じた根拠には、自己の反応の知覚はほとんど見られないことが明らかにされた。これらの特徴は、懸念的透視感が生じる状況の特徴とは異なるものである。したがって、懸念的透視感と期待的透視感では、その感覚が生じるメカニズムが異なると推察される。

まとめ 本研究は、懸念的透視感に関する基礎的研究として、懸念的透視感が生じている状況の特徴について検討した。懸念的透視感の主な特徴は、以下の三点にまとめられる。第一に、伝えていない理由には自己利己的な理由と、他者配慮的な理由がある点である。第二に、相手の反応からの推測や、自己の反応の知覚によって懸念的透視感が生じる点である。第三に、懸念的透視感によって状況に応じた振る舞いが生じやすい点である。

懸念的透視感に関する検討を行うことにより、対人コミュニケーションの理解を深めることができるようになると考えられる。今後は、本研究で得られた知見に基づき、懸念的透視感に関する実証的知見を蓄積していくことが期待される。

引用文献

- Carver, C.S. (1979). A cybernetic model of self-attention processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1251-1281.
- Carver, C.S., & Scheier, M.F. (1981). *Attention and self-regulation: A control-theory approach to human behavior*. New York: Springer-Verlag.
- Carver, C.S., & Scheier, M.F. (1998). *On the self-regulation of behavior*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gilovich, T., Savitsky, K., & Medvec, V.H. (1998). The illusion of transparency: Biased assessments of others' ability to read one's emotional states. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 332-346.
- Jones, R.A. (1977). *Self-fulfilling prophecies: Social, psychological, and physiological effects of expectancies*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Kelly, A.E. (1999). Revealing personal secrets. *Current Directions in Psychological Science*, 8, 105-109.
- Kelly, A.E. (2002). *The Psychology of secrets*. New York: Kluwer Academic.
- Kelly, A.E., Klusas, J.A., von Weiss, R.T., & Kenny, C. (2001). What is it about revealing secrets that is beneficial? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 651-665.
- 北山 忍 (1994). 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.
- Merton, R.K. (1948). The self-fulfilling prophecy. *Antioch Review*, 8, 193-210.
- Norton, R., Feldman, C., & Tafuya, D. (1974). Risk parameters across types of secrets. *Journal of Counseling Psychology*, 21, 450-454.
- 太幡直也 (2006). 被透視感の強さを規定する要因：自己への注意と他者の視点取得についての検討 社会心理学研究, 22, 19-32.
- 太幡直也 (2008a). 懸念的透視感が生じている状況における対人コミュニケーションの特徴 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士論文
- 太幡直也 (2008b). 被透視感 下斗米淳 (編) 自己心理学6 - 社会心理学へのアプローチ 金子書房 pp.25-26.
- 太幡直也・押見輝男 (2004). 行動の解釈が被透視感を感じる側面に与える影響：シャイネスとの関連, 対人社会心理学研究, 4, 141-146.
- 丹野義彦・坂本真士 (2001). 自分のこころから読む臨床心理学入門 東京大学出版会
- Vorauer, J.D. (2001). The other side of the story: Transparency estimation in social interaction. In G. B. Moskowitz (Ed.), *Cognitive social psychology: The Princeton symposium on the legacy and future of social cognition*. Mahwah, NJ: Erlbaum. pp.261-276.
- Vrij, A., Paterson, B., Nunkoosing, K., Soukara, S., & Oosterwegel, A. (2003). Perceived advantages and disadvantages of secrets disclosure. *Personality and Individual Differences*, 35, 593-602.

(受稿3月21日：受理5月7日)